

樂がく
毅き
論ろん

永和四年
(348年)

魏晋唐小楷④

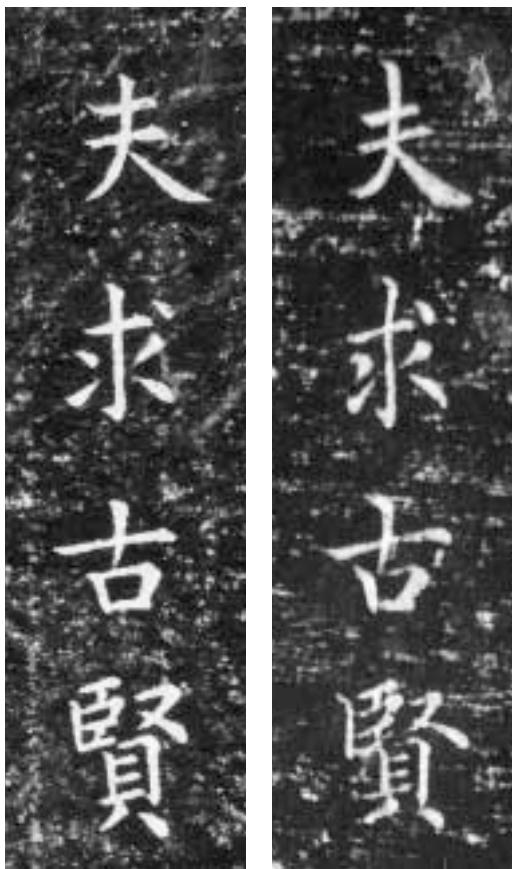
木雞室

木雞室
伊藤滋

比較図版②



比較図版③



樂毅論は、紀元前戦国時代の武将・楽毅の事績を後の三国時代の魏の國の夏侯玄（字は泰初）が論じた文章である。これを書聖・王羲之が永和四年に楷書で書いたと伝えられる。古くから王羲之楷書の第一に挙げられる。先の小楷と同じく真蹟は伝えられず、明清時代の刻本が伝えられるのみである。しかし正倉院には、光明皇后が臨書したとされる樂毅論が伝えられている。天平時代には古い模写本が伝えられていたようである。図版に示した樂毅論の拓本は、光明皇后が臨書と書法面で通じるものがある。（比較図版②参照）今回紹介したような用筆の抑揚が顯著なものとは異なり、ややふっくらした穏やかな趣の刻本も多く伝えている。（比較図版③参照）

次号は、王献之の「洛神賦十三行」です。

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。
私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りいただければ幸いです。

世人多以樂教不時拔苔即墨

論之

夫求古賢之意宜以大者遠者先之以近
而難通然後已焉可也今樂氏之趣或者其
未盡乎而多方之是使前賢失指於將來
不之惜哉觀樂生遺燕惠王書其殆庶乎
機合乎道以終始者與其喻昭王曰伊尹放

書道芸術院 平成の群像 (2010)

第57回書道芸術院展出品



板垣洞仙



「書に対する思い」

私の「書」に対する気持ちと言うか思いは、書を始めた頃から常に変化してきている。今も時々これで良いのだろうかと考えることがある。

高校や大学時代には、自分は書が下手だから、少しでも上手になりたいと懸命に練習に励んだ。好きなどというより、ただ上手になりたいの一心であった。そして高校教師になってからは、生徒に馬鹿にされないようにと、法帖の練習に、書論・書道史等の学習に一心不乱に努力した。その頃、気持ちに

余裕など勿論全然なかった。でも、毎日の生活は書道・国語の教師として授業の準備に、書道・バレーボール部のクラブ指導にと充実していた。

二十代後半、院展・毎日展等でいろ

いろ賞をいただいた頃からは、書に自信を持ち、人に敗けたくないという闘

争心が強くなっていた。諸先輩方が私の書作品について、いろいろ指摘してくれる。うれしかったが、その解決法が見つからず、逆にそれが気になつて心に余裕が持てず、書に対して挑戦的になつた。その後四十年代までは、毎日展等で院以外の方々と接する機会が多くなり、少しづつ書に対する考え方方が変わってきた。特に院の前衛書は「どうあるべきか」・「どうすべきか」等自分で書でなく、書をどう普及させようかと考えていた。勿論結論は出ない。五十代に入ってからは、自分なりの書というものを持つことができるようになつた。書くことが楽しくなつてきた。ましてや、六十代になつてゐる今、書に対して多少の余裕が持てるようだ。

今現在の私の書に対する思いは、

一、鋭い線質による表現法とは、
二、余白の美的感覚を育む法とは、
三、墨色の美をいかに表現するか。

この三点である。この三つが一つになり、これに集中した気持ちで書くことができれば、品のある作品が出来ると考えている。でもこの思いはまた、変わらう。

書のひろば

理事長 辻 元 大 雲

全日本書道連盟活動に ご協力を

さる3月4日平成21年度第2回通常

総会が開催され、平成22年度事業計画、
予算などが決定した。

1 夏期書道大学講座

本年8月6～8日、東京赤坂ツイン
タワー東館を会場として先の講師陣に
より行われる。（敬称略）

写経 一色白泉、行草書 鬼頭墨峻
隸書 関 吾心、かな 船尾圭碩
文物鑑賞 玉村壽山、漢字かな交じ
り書 吉澤鐵之
申し込み要領など詳細は6月に発表
される。誰でも受講可。

2 書道講演会の開催

例年11月（日展開催時）と3月総会
開催時に行われる。書道教育のほか一
般的なテーマでも行われる。

3 助成事業

昨年度から始まつた事業で、県単位
または市町村単位での書道講演会・講
習会への助成事業で上限10万円の助成
が受けられる。会派単独での事業は対
象にならない。是非活用を。

4 展覧会・講習会・講演会などの 事業に対する後援

連盟会員が主催に加わる展覧会など
であれば名義使用、賞状交付とも無料。

5 書道文化の海外との交流

隔年で中国書法家協会との交流を行っ
ている。本年は日本側が中国へ代表団
を派遣する予定となつていて。

連盟会員が訪中する時の便宜供与は
随時行つていて。

6 その他

* 文芸美術国民健康保険の取り扱い
文芸・美術および著作に専従し、連
盟に加入している方。書家以外の業を

もつている方、法人事業主、従業員は
加入できない。保険料は収入の多少に
かかわらず均等となつていて。

* 社会事業に協力のための「助け合い
募金」実施。団体会員のほか個人は評
議員以上の役員中心に寄付金を募る。

* 平成23年度に創立60周年を迎えるこ
ととなり記念事業の企画準備を始める。
* 会報は年3回発行される。

本院は維持団体として連盟の中核を
担つていてが会員加盟率は芳しくない。
原則的に書道芸術院展審査会員以上の
方は連盟会員として推薦できるので未

加入の方は院事務局までご一報を。会
費は正会員が年間12000円、準会
員6000円。

賛助団体は年会費30000円、書
道芸術院に所属の各団体は資格あり。
* 加入賛助団体（院関係）

黒潮書道会・馨香会・玄遠社・書径

舍・書泉会・石心会・玉松会・白玄会・
白扇書道会・剣筆の友書道会

白琉（前）
総務部主任 白石和楓（近・搬入）、
柳橋香仙（前・搬入）

委員以下省略

ご協力のほどよろしくお願ひしたい。

さる2月1・2日開催された第62回

展運営委員会において当番審査員、会
員賞選考委員、運営事務局など主要人
が決定し、4月13日事務局合同会議に
て細部の打合せ、事務局担当などが決
まった。（敬称略）

実行委員長 飯島春美（女性初）
審査部長 石飛博光

総務部長 鬼頭墨峻
陳列部長 中村雲龍

以下院関係

運営委員 下谷洋子（かな）、坂本素
雪（近詩）、小林琴水（大字）、千葉

蒼玄（前衛）

各展実行委員長 大野祥雲（四国）、
砂本杏花（関西）、浜田豊光（仙台）

会員賞選考委員 辻元大雲（理事）
下谷洋子（かな）、小林琴水（大字）、
金井如水（前衛）

当番審査委員 濱田尚川（漢I）、最
首翠風（漢II）、石井明子（かI）、
大辻多希子（かII）、飯高和子（近）、
佐藤無極（近）、畠中弄石（近）、上
妻華竹（大）、小山鳳来（刻）、板垣

洞仙（前）、大平鉄男（前）、千葉蒼
玄（前）、塙越紅苑（前）

総務部副部長 種谷萬城（漢I）、金
井如水（前）

陳列部副部長 田村鄭雲（近）、北村

第1回高知毎日書道展開催

本院大野祥雲常務理事ほかのご努力
で新しく誕生した。

会期 4月12日～18日
会場 高知市民アラザ
祝賀会に参加した。

開会初日には恩地春洋会長が開会式・
祝賀会に参加した。



高知毎日書道展会場

財団新体制発足

新指導部にご支援を
理事長就任あいさつ

恩地春洋



理事長就任あいさつ

大元辯



種谷扇舟先生の後を受けて、理事長を務めてまいりましたが、この間ご協力頂いた皆さんに、心からお礼申しあげます。

種谷先生の一和を中心とした組織作りの上に「作家集団を目指して」とスローガンを掲げ、新人の発掘に努めてまいりました。多才諸々の院ですが総合団体である本院は「和」と共に基本的な運営目標であると思います。

断力に優れ、明朗闊達、何事にも積極的に取り組む人であります。新役員も澁刺として清新の気にはふれ、二十一世紀にふさわしい「指導グループ」だと確信しております。

財団法人書道芸術院が今後、ますます発展していくよう、会員の皆さまの絶大なご支援、ご協力をお願ひ申し上げ、ご挨拶といたします。

元より浅学非才の身であり、皆様方のご期待に応えられる力量はありません。香川雲、香川春蘭、加藤翠柳、中島邑水そして種谷扇舟の歴代会長はじめ多くの方が宮々と築き上げ、充実発展させてこられた院の歴史と伝統を引き継ぎ更に発展させていかなければなりません。

このたび財團法人書道藝術院理事長の大役を恩地春洋先生からお引き受けすることとなりました。60有余年の歴史を刻み、多くの先達により築き上げられ発展してまいりました本院の運営、舵取りの中核を担うこととなり、正に身の引き締まる思いです。

今後は多くの先輩、同志の皆様のお力をお借りし、与えられた重責を果たすべく頑張ってまいりたいと存じます。これまで以上のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げ、就任のご挨拶とさせていただきます。

財団法人書道芸術院役員
会長○恩地春洋 監事○金井同○名越
名誉顧問 香川倫子

理 常務理事長
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
事 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
宮 西 滝 砂 嵯 齋 小 小 小 板 飯 下 小 大 辻
澤 林 本 峨 藤 濱 林 伏 垣 高 谷 竹 野 元
梅 乘 春 杏 大 雨 大 琴 小 洞 和 洋 石 祥 大
徑 宣 芳 花 拙 城 明 水 扇 仙 子 子 雲 雲

常任顧問　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　名譽顧問　會長

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

山鳥水黒木尾柚村浜小香恩
下山谷川村形口野谷伏川地
皓岳鴨江偉船鼎青大芳竹倫春
映風村翠山萍仙仙村子洋

事務局長 参評監 同議同 員事
千外尾大上山山三牧平浜津千千田種佐坂最後熊加稻石石名金
葉所崎平柳田口森 川田田葉葉守谷藤本首藤谷藤垣田井越井
蒼思栄鉄佳梓仙慧泰峰堂和蒼耕光萬無素翠大宗眺小春明蒼如
玄水巖男規江草香濤子光秋玄風昭城極雪風峰苑溪燕窓子竹水

現代詩文書（二）

坂本素雪



「雨の中の自分」

坂本素雪書

1947年私の生まれた年「書は芸術である」の雄叫びを上げ書道芸術院が結成された。しかし芸術の世界では、まだ書は芸術として認めてもらえないのが現状。何故、芸術として認めてももらえないのだろうか？要素が沢山あり、これを考へると眠れなくなるからさて掛け、私自身、書は芸術であると言う理念の基に制作している。

まず一般に、作品制作は素材選定から始まるが、これが肝要である。特に現代詩文書の場合、素材が口語文、自由詩、短歌、短章、俳句と、我々の日常生活と密接な関係にあるものが多く幅広い。

詩文が好きだから、作家の考えと共に鳴するものがあるから、漢字ひらがなの配分が適度にあるから等々、理由は様々なあると思うが、何れにしても詩文から感ずるもの、技術と表現力によつて象徴化する紙面の中の空間芸術でなければならないと考える。

最近、各書展を観ても作者の訴えが伝わって来る作品はごく僅かである。何故だろうか：

読めるとか読めないと、書派書風で無いとか、このような締め付けの中での作風だから、ヴァリエーションが皆同じになってしまい魅力を感じないのである。

要するに自己主張に欠ける

21世紀の書 —私の主張—

前衛書（二）

平岡千香子

自分の基を作る
(アレない)

平成15年仙台で開催された前衛書部勉強会の要項に、作品を持参することが明記されていました。私は新作ではなく、以前から心の欲するままに書き留め置いていた未発表の作品を提出しましたところ、意外なことに話題作として取り上げていただき、大感激。

その時は、信念を貫き、自分自身を曲げない大切さを



「共生」私の信条

平岡千香子書

仙台の勉強会で、とても有難く、感謝の念を持ち続けています。その時の感動に触発され書いたものです。

実感することが出来、感謝の念でいっぱいでした。

自分の書作をやり遂げるために、身につければならないのは、先ず第一に書線です。誰もが書の命は『線質』。と口に出して言います。書道藝術誌五八号で「線質については、言葉が一人歩きしている。頭ではなく、古典を座右に置き身体で会得するもの」(村野大仙先生のことば)ズバリ、私自身への叱責の声だと認識しております。

自分の基を確かなものにするために筆を持ち、コツコツと古典と取り組んで一步一歩進んで行くしか方法はありません。静かに行くものは遠くまで行くことばを信じて。」「老婆は一日にしてならず………」瀬戸内寂聴さんの法話が聞えてきそうです。

『しあわせへの出会い』

西 田 啓 水

(漢字部・審査会員)

大阪市農協（JA）婦人部主催の文化活動を行なうことになった昭和54年に文化活動に対するアンケートが届き迷わず書道教室に応募しました。私は町会、農協の役など色々なことをしながら趣味として書道を習う気持になりました。基礎から勉強しました。入会した時は実用書が主で、美しい字を書くことに専念、今思えば、美しく書くことだけでは全く面白くなく、何かものなりなさを感じている矢先に初めての先生が体調をこわされ、小学校の教え子で若い先生を紹介しますといわれ、56年に小林琴水先生が来られご指導いたくことになりました。それが、琴水先生との始めての出会いでした。会員も五、六人でしたが、再募集で、Ấと言葉間に20人～40人に増え、すごく盛り上りました。年令層も20代から80才代まで、それは楽しい教室になりました。私もはじめて書道の楽しさを知りました。手芸や民謡、お料理などもありましたが、書道が一番多く、農協も大喜びでした。と申しますのも入会するには積立をしなければならない

のです。全員書くことの楽しさを覚え、始めて作品の作り方がわかりました。半紙にしか書いたことがなかったのに紙の大きさも色々とあり、芸術院展、毎日展、春洋会展と一年中、出品に追われました。全員熱心に書くことに燃えました。そうしている間に、入選、入賞する人が出来、益々エスカレートし、一時は書道に振り回された時期もありました。書くことも楽しかったですが、先生を囲んで一泊旅行を計画し温泉旅行も楽しみました。これも何年間か続きましたが、先生もお忙しくなられ春洋会の合宿、芸術院の講習会に参加するようになり、また違った樂

命ですが、終った時は足腰はガタガタで下敷の上にしゃがみ込んでしまいました。でも一晩寝たら忘れて、また書きたくなるのです。不思議な魔物です。毎日出品が終ってホッとしたら、また芸術院展作品作りで、ひと休みする間もないのですが、それが良かつたのか一年中書いているのです。よくここまで続けてこれたものと改めて自分自身で感心しています。息子や嫁、孫達にも応援してもらながら今も頑張っています。春洋会でも最年長者になつて

ています。息子や孫(幼稚園の頃から、現在24才)が好きで飼っているものですから屋間は私がお守りをします。まるで動物園にいるみたいです。イグアナは夜中、私の布団の中に入つて来てビックリすることもたびたびありました。今は淋しくなりました。そんな生活の中、ホッとした時に筆を持つことは私にとっては、やすらぎのひとときです。自分の部屋に入つて一日中、書いたこともありました。今振り返つて書道のレールに乗つて脱線しないで励んで来れたことに喜びを感じ、ここまで無我夢中で來れたこと本当にしあわせに思います。これもご指導いただいている先生、家族、教室の友人のお陰と感謝しています。命ある限りこの楽しみを持ち続



第45回記念　書道芸術院展出品

西田啓水書

て来ましたが、未だ現役で動いています。有難い事と感謝して手を合わせていました。婦人会のお役もボチボチおろしていただきたいと思います。家の中央は人間様だけではなく、猫が八匹、犬二匹、モルモット、イグアナ(体長一m四〇cm)。昨年死にましたが16年家族の一員として、一緒に生活してきました。これも毎日出でますから屋間は私がお守りをします。まるで動物園にいるみたいです。イグアナは夜中、私の布団の中に入つて来てビックリすることもたびたびありました。今は淋しくなりました。そんな生活の中、ホッとした時に筆を持つことは私にとっては、やすらぎのひとときです。自分の部屋に入つて一日中、書いたこともありました。今振り返つて書道のレールに乗つて脱線しないで励んで来れたことに喜びを感じ、ここまで無我夢中で來れたこと本当にしあわせに思います。これもご指導いただいている先生、家族、教室の友人のお陰と感謝しています。命ある限りこの楽しみを持ち続

第63回書道芸術院展〈続〉

実行委員長

辻元大雲

都美改修に伴う2年間閉館をにらみながら、63回展は前年並みの企画で展開され、出品点数減少傾向には尚歯止めがかかるぬ状況下ではあったが、質的にはやや向上を印象付けた内容であった。

昨年6月中旬に開催された63回展運営委員会で展覧会の機構と特別賞選考委員、当番審査員、事務局編成などを決定。大作出品者は各部より選抜、漢字部（恩地春洋、大野祥雲、小林琴水、山鳳来）、前衛書部（浜谷芳仙、千葉蒼玄）の計12名。

基本的には62回展を踏襲したが表彰式、祝賀会の日程を繰り下げ、参加者への便宜を計れたことが特色であった。

○外部評論家の眼

恒例となつた外部審査。今回は書道

ジャーナル研究所の小野寺啓治氏、五木書房の桑原喬氏の2名の先生方に依

（副部長 江本興舟・福島李舟）

頼。2月6日、展覧会初日の記者会見の折に選考とご批評をお願いした。ご高評は別掲の通りで、印刷して參観者に配布、作品への掲示も行った。

担当（恩地春洋・辻元大雲）

○総務部（12月2日～2月12日）

昨年より搬出入部を統合して搬入から審査、撤回、搬出の各作業に関わり、

期間も長く大変であったがベテラン委員により大過なく事務遂行できた。東福部長の細かい心配りと綿密な計画のもと、12月初めの一般公募・無鑑査の未表装（まくり）作品搬入受付整理、中旬の鑑別審査のお手伝いと接待、作品返送作業、1月中旬の役員作品書類搬入、下旬の都美での作品搬入受付、

整理、会期中の受付にも勤員、表彰式・祝賀会の受付補助も担当。2月11日当日撤回作業が表彰式と並行したが極めて順調に進行、夕刻の帝国ホテル祝賀会には陳列部共々全員が参加していた

だいた。縁の下の力持ちとして各方面に亘り活躍していただいたご苦労に感謝申し上げたい。

（部長 東福青草）

○審査部（12月11日～1月31日）

例年通り12月中旬に無鑑査・一般公募の鑑別・審査は未表装で行う。出品票のバーコード化により審査遂行と事務処理は大幅に改善され、要領よく進められた。入賞率の上限下限で少数组体への適用が難しく、今後検討の余地がありそうであった。原則適用をやや彈力的に行い、出品者の不利益を無くすように努めた。各部とも概ね順調に進行したが、漢字・現代詩の事務作業を2日目に持ち越すことは扱い点数の差からやむを得ないことであった。当番審査、委員の先生方のご努力と温情ある審査に感謝。

審査会員候補以上の特別賞選考は1月30日に審査対象の大賞選考を、31日に審査会員対象の峰雲賞選考を行う。

審査会員候補は各部より10%の枠で

候補を選考し、更に $\frac{1}{2}$ を全体選考

対象として絞り、選考委員全員による投票により各部ごとの序列を決める上

で、漢字から前衛書までの5部門トッ

プ作を並べて最終投票、大賞にかな部

群馬の坂口とし子さんを決定。更に準

大賞が同様に投票により5名決定、白

雪紅梅賞10名は各部のシェアーを考慮

した上で最終的にはやはり投票により

決定した。

次に翌31日、審査会員対象の峰雲賞

選考が8名の選考委員により行われ、

各部より20%の候補、更に $\frac{1}{2}$ に絞っ

て全員投票の結果、漢字部高知の川島

舟錦さんが峰雲賞を受賞した。審候、審査会員を含め候補作には青シール（審候）、赤シール（審査）を名札に貼付、入賞一覧に候補作者名を掲載したプリントを參觀者に配布した。

（副部長 太田蓮紅・弓削光峰）



審査会場

○陳列部（2月5日～2月11日）

昨年同様5室使用、B1のA棟第1室には院幹部、大作を正面に、対面中央に峰雲賞、同候補作を集結、院の顔として効果的な陳列を行う。更に審候大賞・準大賞・白雪紅梅賞及び候補作をB棟中央に、無鑑査院賞・毎日新聞社賞を隣室に配置し、主要作を集中陳

列した。

1階2棟、2階2棟には審査会員から審候、無鑑査（特選以下）、一般公募（準特選以下全）を資格別・部門混合陳列とした。5日の陳列は陳列部委員、動員お手伝い約60人のほか業者によりスマースに行われ午後4時過ぎに終了した。翌初日には部長他で点検を行った。前衛作品などに縦横逆などあり気抜けない。

11日午後2時より撤回作業は帝国ホテル表彰式と並行のため、陳列部委員と総務正副部長、業者のみで行う。人員は少數であったが順調に作業は進み、午後4時過ぎ搬出準備を含め完了。直ちに帝国ホテル祝賀会へ合流していただく。ご苦労様でした。

（部長 田村鄭雲）

（副部長 尾形澄神・北村白疏）

○記者会見（2月6日 都美）

例年通り会期初日10時より、会場第1室にて行う。毎日新聞社ほか評論家、報道関係者約20名の参加を頂き開催。

恩地春洋理事長より63回展の概況、基本的な構想、今後の課題、展望などを説明、辻元大雲実行委員長より配布資料をもとに実施概況報告を行う。出品点数の減少傾向など具体的な数字を挙げ、今後に抱える問題点など率直にお話した。

（担当 恩地春洋・辻元大雲）

を齋藤雨城、辻元大雲、篆刻刻字を鳥山岳風、前衛を浜谷芳仙の各先生よりやや厳しい内容もあったが貴重なご意見を頂いた。

審候は種谷萬城主任、金井如水進行でやはり特別賞選考委員より各部の作品傾向や問題点をお話し頂き、個別の作品についての批評も行った。

無鑑査・一般公募も同様で、各部審査主任にご担当頂いた。無鑑査は小伏板垣洞仙主任、尾形澄神進行で、各室に分かれ入賞作を中心に取り上げ、質疑応答を交え活発に行われた。各担当先生方よりレポートをご提出いただきが紙面の都合上割愛させていただきます。ご容赦を。

記者会見

（担当 恩地春洋・辻元大雲ほか）

○祝賀会部（2月11日 帝国ホテル）

表彰式と祝賀会を統合してご担当頂く。本年はホテル側の配慮で11日午後4時からの式となり、地方からの参加者により午前中の展覧会見学、研究会参加も可能となり好評であった。

表彰式は3階富士の間にて麻生峰扇

副部長をチーフとして、ゆったりとした広いスペースに華やかな雰囲気の中

で行われ、受賞者にとりまたとない記念すべき式典となつた。昨年より無鑑査は秀作以上、一般公募も佳作まで個別授与となり参加者も増加した。院賞

以上は恩地理事長、辻元・大野・浜谷

各常務理事が個別授与を行い、特選以下は院財団理事10名がそれぞれ授与を



全体会（研究・解説会）



<漢字部> 無鑑査研究会

特集：第63回書道芸術院展

行つた。毎日書道会寺田健一専務理事には授与とともに激励のご祝辞を頂く。係の誘導の手際良さもあり極めてスムーズに進行した。受賞者を代表して謝辞



準大賞 授与



峰雲賞 授与



峰雲賞受賞
川島舟錦さん
よろこびのごあいさつ

祝賀会は2階孔雀の間東西を会場とし、5時半より受付、6時開宴。本年は通常年に当たり、毎日新聞社はじめ評論家、報道関係の方のみ限られたご来賓約40名にお出で頂いた。会員は約

を大賞受賞のかな部坂口とし子さんより頂いた。



<謝辞> 坂口とし子さん

恒例の入賞者紹介はまず本年毎書道展名誉会員に推举された小伏竹村・村野大仙両先生を紹介、続いて峰雲賞受賞の川島舟錦さん、大賞の坂口とし子さん以下順次各賞受賞者を壇上で晴れ姿を紹介した。

閉会の言葉は大野祥雲実行副委員長が述べ、宴を閉じた。

(部長 麻生峰扇 (副部長 石田春窓)
(副部長 崎井恵風 祝賀会担当)

○運営事務局

芸展運営の全般に関わり事務処理を担当。膨大な事務作業をコンピューターを駆使して、事務処理担当のリンクス社との連携を密にして行う。出品個票の出力・搬入統計の集計、審査結果の通知、陳列計画、出品者目録作成、作品配置50音順データ、表彰式座席配置、祝賀会座席配置など総務・審査・陳列・

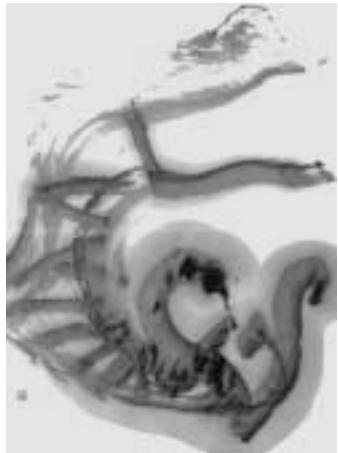
祝賀会・会計などあらゆる部門の事務処理に関わった。陰的努力に感謝申し上げたい。

(事務局長 千葉蒼玄)
(事務局次長 尾形澄神)

院賞受賞者ごあいさつ



・線の動きがゆったりし、生き物のように豊かに舞う。これにじみが全体を盛りあげ、絶えず活動する開放感を放つ。空とピッタリするのがいい。



「龍」

「白井恭郎の句」



砂本杏花

・木簡風の暖かい質感なのに明るく快活に動き、自由な線の動きが安定して深さを発する。潤渴の差で明暗もくっきりするにぎやかな作だ。

「門」



小山鳳来

・文字の面を横線が積み重なる手法で、立体感をそっと表す。厚い線がずっと広がり、威風堂々とする。文字は自然の形で、古格の風勢をかもし、時を語る作だ。

「鶴舞」



半田藤扇

・気持ちよく上から下へ切り込み、一字ずつはしっかりと足を踏んぱり堂々と立つ。この伸びやかな一気性の充実感がここちよく伝わってくる。動きを見付けた表現だ。

評論家の眼 小野寺 啓治の 眼

下谷洋子



「君かへす」

・かなの線で動きながらリズムは横にゆったり動いたり、しなりを入れてがっちりした流麗さという新しさを生む。妖しさもあり、知性の密度も見える。

津田和秋



「いのちの叫び」

川島舟錦

・ずっと強く重くはき出す氣迫には鮮明なひらめきが含まれていて、大きな空間に広く堂々と、それもすつきりと佇む。白黒の戦いが一体化したところに驚く。

評論家の眼

桑原喬の眼

・伸び伸びした生氣ある線條で書いており作品が冴えている。布置
良く構成がよい。



「こころなく咲く」

田村澄子

・潤渴筆を程よく、飛沫をまじえて造形に妙趣を見せてている。氣概
もまた充実している。



「舞雪」

稻垣小燕

・文字通り「滝」をイメージした作。流れ落ちる滝というよりも、
寒さのために氷結した滝だらうか。センスがよい。

特集：第63回書道芸術院展

「滝」



滝 春芳

宮下洋子



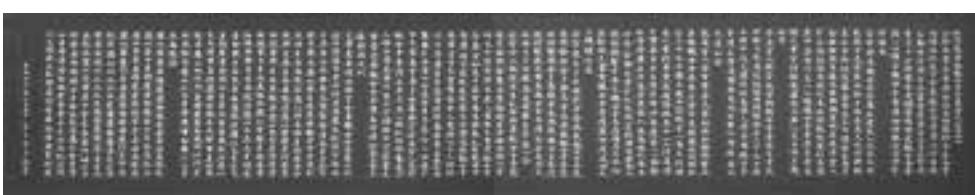
「ひとり林に」・立原道造の詩を渴筆を多用して詩情豊かに書き上げており、感性豊かな作。



青柳明華

「圓」

・「圓」方形の紙面いっぱいに書いていながら窮屈な感じがしないのは、白を巧みに生かしているからだろう。書線に充実感がある。



「妙法蓮華經觀世」・紺紙金泥で妙法蓮華經を真摯に丹念に書いている労作。点画良く精緻整正な筆致の作。



「月色満」

・巧みな筆捌きで流麗な、リズム感の心地よい作。渴筆が効果的で美しい新味を見せている。



「ひとり林に」・立原道造の詩を渴筆を多用して詩情豊かに書き上げており、感性豊かな作。



青柳明華

「圓」

・「圓」方形の紙面いっぱいに書いていながら窮屈な感じがしないのは、白を巧みに生かしているからだろう。書線に充実感がある。



前田龍雲

左の法帖の中から何文字臨書してもよい。（掲載部分以外は不可）

特別研究部臨書課題

（全紙以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

〈解説〉龍門造像記は、書法、運筆の面からその特徴を“方筆”と説き、鋭角的な起筆・終筆、右肩上りの力強い構成になっているが、この造像記は龍門二十品の中でも趣を異にし、筆意がよく暢達し流麗であり、鄭道昭の摩崖の諸刻石と相通じることが指摘されている。

（編集部）

願母子平安造
弥勒像一區以
置於此至廿二

※落款を必ず入れる
署名、もしくは〇〇臨
(押印のみも可)



かな研究部

高野切第三種 (伝・紀貫之) ②

※上記の掲載歌一首
高野切同様、歌題および詠書は和歌よりも一~二字下げて書きはじめ、作者名は行の下方に置き、また和歌は一~三行にわたって書いている。その書体は女手が中心であるが、中に部分的に草仮名だけで書いた箇所があり、第三種の筆者が巻物全体に新鮮味を施すべく心をくだいた様子が窺われて興味深い。

よみ
よみびとしらす 須
だいしらす 可
那可
よのなかはいづれかさしてわがならむ
よのなかはいづれかさしてわがならむ

きじまるをざやじれだむる
貞御御時に、万葉集はいつばかりつ
くれるぞとほせたまひければ、よみ
てたてまつりける

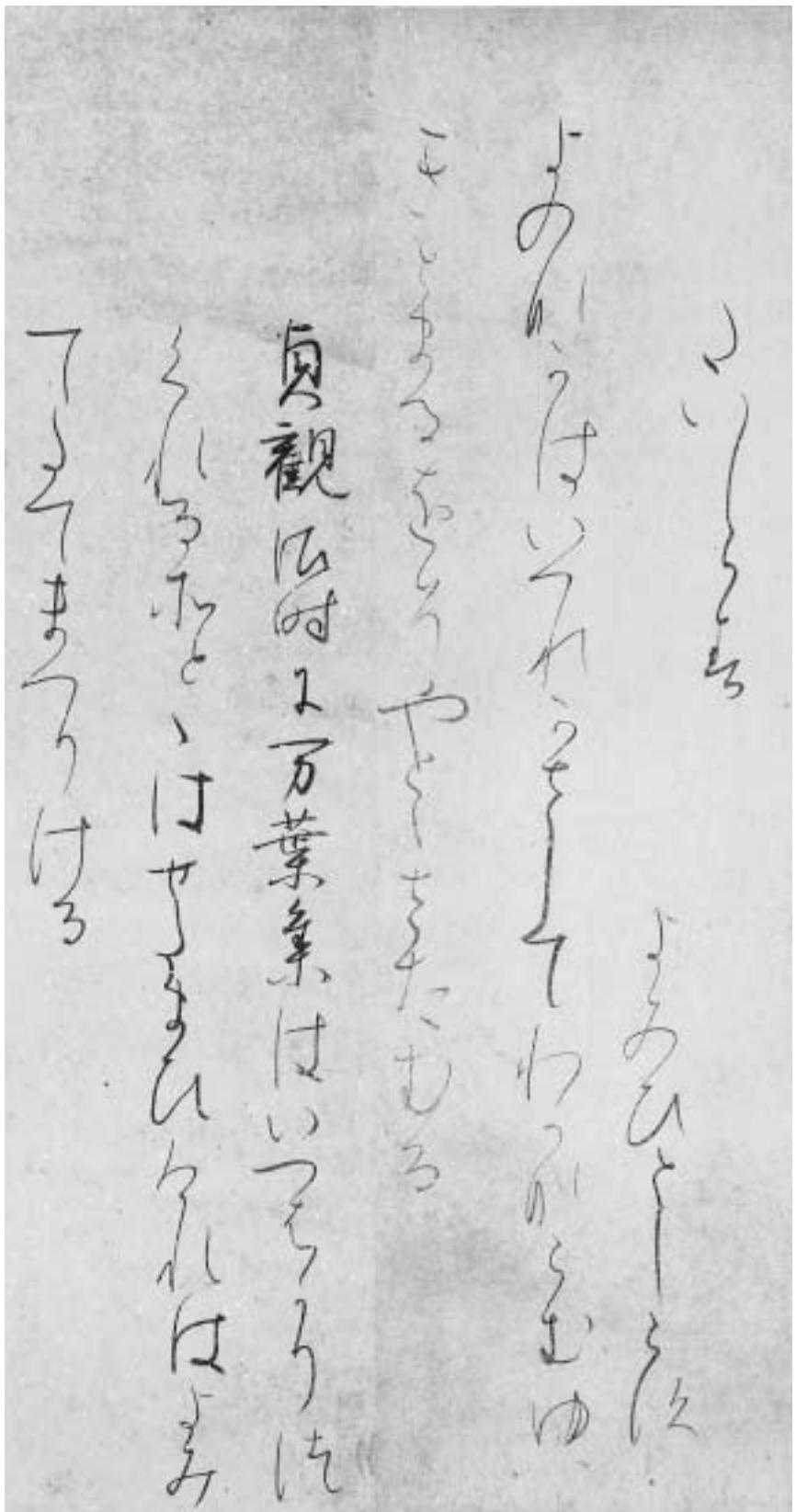
(料紙可)

特別研究部臨書課題

II (全紙以内・縦横自由) 左記の掲載以外も可

（解説）書写形式は、ほかの二種類の高野切同様、歌題および詠書は和歌よりも一~二字下げて書きはじめ、作者名は行の下方に置き、また和歌は一~三行にわたって書いている。その書体は女手が中心であるが、中に部分的に草仮名だけで書いた箇所があり、第三種の筆者が巻物全体に新鮮味を施すべく心をくだいた様子が窺われて興味深い。

（編集部）



*落款を必ず入れる。○○臨 (押印のみも可)

(93%縮小)

習い方解説 (二)

濱田尚川

含秀敷栄

(しゅうをふくみ、えいをしく)

鋼線のような勁味、變化百出：
草木の花咲き栄ぶ、転じて
人の栄ぶるに言う語

雁塔聖教序から学ぶ。超妙清俊
のねじれが加わり吊り上げた線に
張りのある強さが生まれる。
細く入った始筆もその筆圧は紙
背に通る強さが大切。リンとした
細線の魅力はここにある。ぐつと
沈めた深い線は千斤、そこから息
の長い吊った細い線を味わいたい。

何と息の長い線—存分に原本から
学びたい。



含秀敷栄

よみ (秀を含み栄を敷く)

書体=自由

習い方解説 (二)

小川弘舟

尋水望山 (みずを尋ね山を望む)
山水を愛する句です。



書体＝楷書

今日は、迫力ある楷書に挑戦します。代表的な古典は、北魏の龍門造像記です。洛陽郊外の龍門山に多数の仏像が刻されていて、その仏像に由来などが書かれた造像記が刻されています。その中で、書的に優れたものを特に、四品とか、二十品とか称しています。共通している点は迫力、気力が充実して素朴さが溢れています。

起筆は鋭い角度で入り、送筆部で力をゆるめず、力強く運びます。転折部は更に気力を加え、終筆を突き上げるようにすると一層迫力を増します。

気力を紙面にぶつけるように書いてください。

かな規定 初段以上【六月十五日締めきり】用紙 半紙普通判(料紙可)

下谷洋子選書

習い方解説 (二)

下谷洋子

いそのかみふるき都の郭公声は
かりこそ昔なりけれ

(古今和歌集)

いそのかみふるき都の郭公声は
かりこそ昔なりけれ

かなは、寸松庵色紙の散らし書きによって日本独自の書の美学が完成されました。寸松庵色紙には概ね七種の散らし書きのスタイルがありますので、創作のヒントにされて下さい。今回はその一つ、左右分裂式を参考にしています。

左右の文字群が同じにならないこと。後半の集団は、左から右へやや傾斜しながら、全体の流れは紙面の外に向かい扉の要のようにどこか一つの視点に繋がるようにすること。要が紙面の内側にあると、行は極端に傾斜することになるので気をつけましょう。あくまで自然です。

大意 素性法師が奈良近くの石上寺でほととぎすの鳴くのを聞いて詠んだ歌。昔と同じように鳴くのはほととぎすだけ、あたりの風物は全て昔とは打って変わってしまった。

よみ方

いそのか(可)み(見)ふ(婦)るき(支)み(ニ)やこのほ(本)とゝぎ(支)す(春)
こゑば(ハ)か(可)りこそ(所)む(無)か(可)しな(那)り(利)け(介)れ(連)

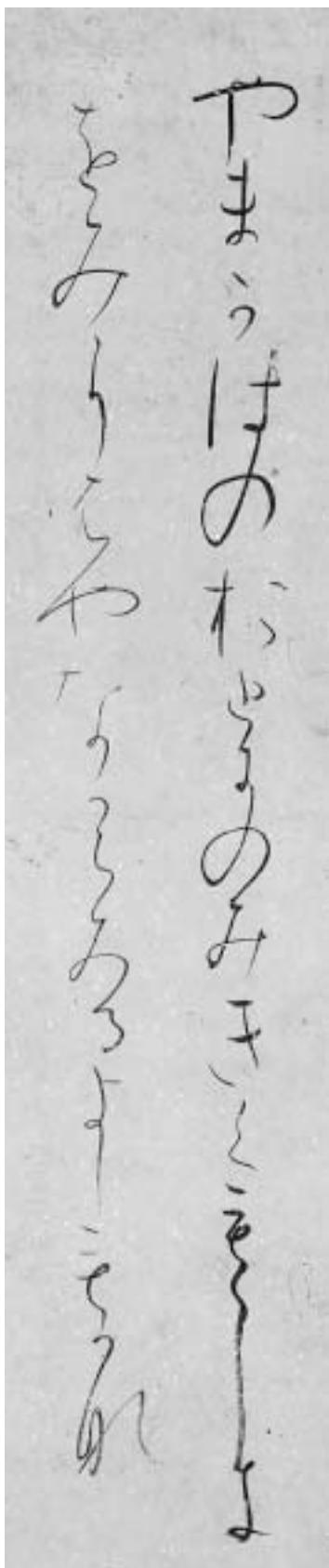
創作

かな規定 秀級以下【六月十五日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

高野切第三種

(掲載写真縮小93%)

掲載写真のうたを全體、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。



よみ方 やまが(可)はの(お)(於)と(尔)のみきく(久)も(毛)ゝしき(支)
をみを(乎)は(者)やなが(可)らみるよしも(毛)が(可)な(那)

習い方解説 (二)

奥田瑞舟

かな条幅規定【六月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

奥田瑞舟選書

ほととぎすしのぶ卯月も過ぎに
しをなほ聲惜しむ五月雨の空

(西行)

二行書きは大字かなの基本的な
形です。この二行の中に変化(文
字の大小・潤渴・連綿・疎密)等
を考え構成します。

隣接部分に同じように見える所
がないか注意してください。

「本とゝ支す」と書きましたが、
漢字で時鳥としたらどうでしょう。
字数が減ることで、ほどよい間が
生れ冒険ができると思います。

創作

よみ方 ほ(本)とゝ支(支)すしのぶ卯月も(毛)過ぎ
に(尔)しを(越)な(奈)ほ聲惜しむ五月雨の空

*たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上【六月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切

半田 藤 扇選書

習い方解説 (二)

半田 藤 扇



書体=自由

今回は文字の画数が比較的少ないため、余白が浮き出てくると思
います。その白の中に、行・草書
の字形で、躍動感のある書風を試
みてみました。行の中心は崩さず
に右へ左へとゆさぶり、表現して
みてはいかがでしょうか？
羊毛筆の長峰を使用。

漢字条幅規定 秀級以下【六月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切

吹田 紅扇選書

習い方解説 (二)

吹田 紅扇

「精神的な格調の高さによってき
りっとしたものにする」書が精神
の芸術であるとの説明です。
行意を感じるような自然な運筆で
書きましょう。

中峰の兼毫筆を使用しました。

凜之以風神
(之を凜にするに風神を以てす)

(孫過庭「書譜」)

書体=自由



紅扇吉

凜之以風神
(之を凜にするに風神を以てす)

(孫過庭「書譜」)

書体=自由

習い方解説 (二)

小伏小扇

ても、み平城京、都^だいた期間は
意外と短く、七四年後に長岡京へ
遷^{おほ}されました。なぜ当時盛んに
遷^{おほ}されましたか
「ひととき」特集^{さく} 小扇書

文字を学ぶとき、概形や特徴を捉えることと、運筆のリズムを掴むという二つの面があります。文字は一つ一つの組み合わせをしっかりと、正しく明解に書くことが、見た目にも美しく読みやすい文字になる最も大切な条件です。ほかに気をつけることは、行頭行末が揃うようにします。文字の傾斜角度を統一し、行の中心線に留意することなどです。

※落款を入れ忘れないようにしてください。
さい。(落款は自分の名前を入れてください。)

用紙=はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体=自由

今月の

ホープ作品
各部総評

No. 587

ベン字部 師範 都丸みどり

温和な中に、字形の正確さと流麗美が見事に表現され、落款まで一貫性があり品格のある良い作品。

◎ベン字部総評 限られた紙面にいかに美しく表現するか、書体も各自の工夫を望む。次回に期待。

(和楓評)



かな条幅部 師範 藤村 昌子

字間の微妙な間を巧くとり、軽やかなりズムで澄明な響きを導いた。 扱い・縦画の終筆の処理一考を。

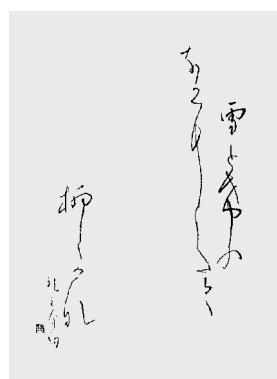
◎かな条幅部総評 連綿の少ない構成のため、文字の大小、間の取り方などに苦慮した様子。超濃墨はかなには不適当です。(洋子評)

漢字条幅部 師範 加藤 紫翠

悠々としたりズムで豊かな性情を伺わせる。「書は人なり」という。温雅な品性の書を賞したい。



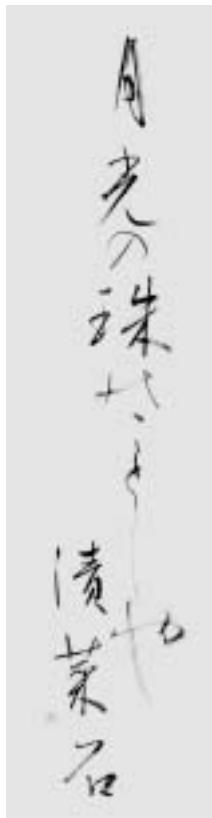
◎漢字条幅部総評 書は現代いろいろな方向に研究が進められ表現も多彩になつたが、最後は人間の魅力ではないだろうか。(春洋評)



前衛書部 特選 大川 久美

線質の厳しさが全体に律動感を表わし、淡墨による静かさと動きを巧みに表現されている。

◎前衛書部総評 美しく巧みな作が多くなった。大胆な作・重厚な作が少ない。(洞仙評)



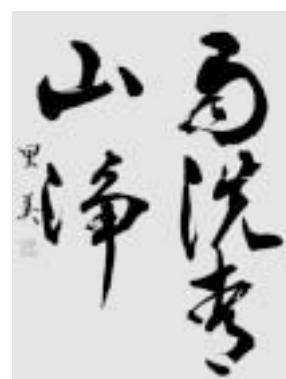
現代詩文書部 特選 石崎 甘雨

重厚さと堅快さが魅力的な横書き。線質の鍛度高く自在な筆の動きが見られた。誤字注意。(舟雲評)

漢字部 師範 川嶋 里美

切れ味鋭く、明快な作。安定した運筆のリズムが爽やかな筆致を生み出していく。競書などで積極的に学習したい。

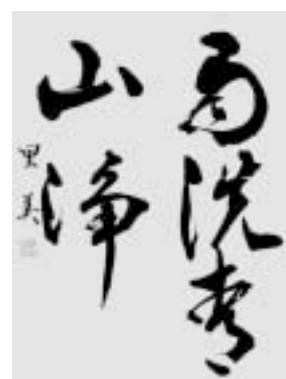
◎漢字部総評 創作表現に古典を活用することは基本的なことだが競書などで積極的に学習したい。



かな部 師範 佐藤 詠子

抑制のきいたしなやかな線が、自然な作品を生みました。一筆で描き切った洗練された墨戲天晴!

◎かな部総評 全般に無理のない作品が多く好感が持てた。一部に創りすぎと、字粒の認識が困難な作あり。目標を明確に。(明子評)



今月の

特別研究部優秀作品(特選)

前衛書
(蓮紅)

大友紅蓉
「息吹き」



169×51cm

大友紅蓉書



90×90cm

漢字
(奥田)

小林純風

「前車可鑑」

◆筆の動きに淀みがなく、一つの紙に一つの流れで作られている作品は見る者の目をうばう。渴筆の中にある墨のたまりが見事。印に一考を。

(倫子評)

◆四字を大胆にまとめた点は素晴らしい。ただ潤筆の線はよいのだが、渴筆は少し浅いのではないか。墨色、雅印の位置も注意してほしい。

(春洋評)

◆篆書四字を前衛精神でまとめ、現代的な表現になりました。線の交錯が少々荒けりにも思いますが、淡雅印の位置も注意してほしい。

(洋子評)

◆淡墨の情感を吹き飛ばす如き荒々しいタッチの作。物怖じしない気迫のこもる制作態度を買う。もう少し余裕があればとは思う。

(大雲評)

- ◆長鋒を使用しての作品だが、躍動感があつて人の心を打つ。さらに細線に深さがあればよいと思う。線の厚さと墨色には配慮がほしい。
- ◆激しい運筆のリズムが紙面を縦横に展開する。潤筆部がポイントになって印象的であるが渴筆や走りすぎの感あり。更なる挑戦を。
- ◆超長鋒の鋒先を操り、繊細な表現ながら強い氣韻を発散する。題名を知り、枯れた樹木が芽ぶき出す頃のエネルギーの熱さと重なりました。
- ◆長い毛先を太くしたり細くしたりしての表現に速度感が感じられる。構成は少し大きさが均一化した感がするので一考を。

(洋子評)
(倫子評)

「前篆」「現篆」「漢篆」候補者一覧表

四谷	月華	蓮紅	墨宣	大雲	白珠	炎佳	翠苑	游水	書泉	一弦	八街	墨宣	大阪	大野	輝風
角田	月中	中島	長島	工藤	佐藤	氏家	荒川	前田	伊藤	木村	三浦	鎌木	鄭街	梅道	梅道
悠香	朱彩	永紅	無硯	僊雨	翠炎	炎久	光空	華美	則子	貴衣	則子	輝風	輝風	輝風	輝風

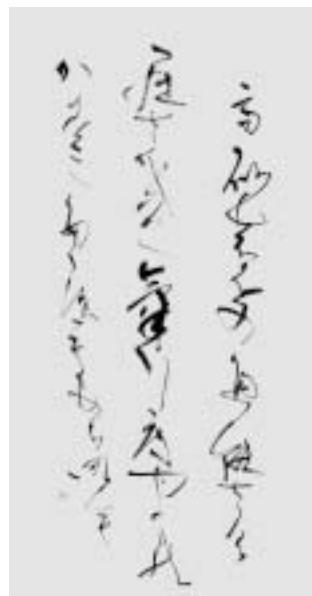
今月は82点(漢17、か10、現30、前22、篆3)の出品がありました。上質で安定した作品には、精度の高さが見られます。地道な鍛錬の結果で身に付いた技術の高さは、線、造形、墨色、余白と総合的な美を追求し、調和のとれた作品を生み出します。一方、技術的な完成度は不十分乍ら、発想や企画の奇抜さで、注目される作品があります。これはまた、新鮮で目新しい感性の豊かさを感じられます。幅広い視野で、様々な分野に興味を持ち、毎月方向の異った作品に挑戦する精神に敬意を表します。しかし、上質で且つ新鮮な作品に仕上げることは大変です。(萬城)

総評

かな

田子白嶺

「高砂の…」



135×70cm

田子白嶺書

◆墨の使い方と呼吸法で、作品に求められる深奥性が出ました。タッチも緩急が加わり表現域の広がりには敬服します。さらに感覚を磨いて下さい。

(洋子評)
◆全体を使って筆を運んで行った力強さを感じます。筆の廻転が実に巧みな運びで自然と生じて来る線の変化が美しい大作に合った運筆。

(倫子評)

◆墨の使い方と呼吸法で、作品に求められる深奥性が出ました。タッチも緩急が加わり表現域の広がりには敬服します。さらに感覚を磨いて下さい。

(洋子評)

◆よく動き、紙に切り込む線も素晴らしい。行間の白、潤、渴の変化もあつ

て美しい作品となっている。よく見る

と各文字の造形の妙も見事。

(春洋評)

◆歯切れよい運筆で正面切った3行構成にゆるぎない技術の高さを感じる。更に懷抱の広さが出てくればと願うのは欲ばかりだろうか。

(大雲評)

◆よく動き、紙に切り込む線も素晴らしい。行間の白、潤、渴の変化もあつ

て美しい作品となっている。よく見る

と各文字の造形の妙も見事。

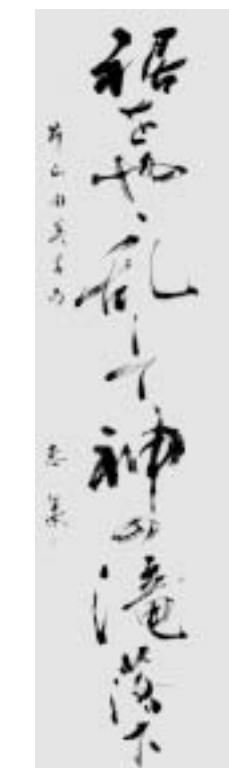
(春洋評)

現代詩文書

(大雲)

阿部恵泉

「片山由美子の句」



165×45cm

阿部恵泉書

◆宿墨による独特の潤渴がリズムを醸し出して滋味ある作。一行書きの構成に安定感あり、技術の高さを見せる。澄明な中に境地の高さあり。(大雲評)

(洋子評)

(倫子評)

(春洋評)

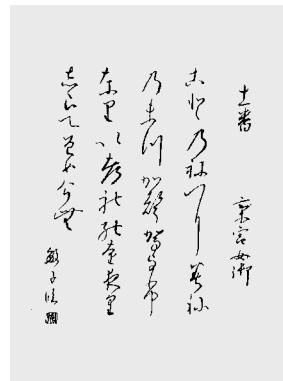
(大雲評)

(洋子評)

か な 研 究 部
(十五番歌合)

選評 山 藤 美知子

今月のホープ作品



高 橋 敏 子

◎かな研究部総評
誤字（斎）（声）多く見られました。判りにくい時は字典で調べて書くこと。この古筆は草がなと女手も入っていますので連綿があります注意してください。

かな研究部成績表

かな研究部 特選 高橋 敏子
草がなの自由さ、たのしさがよく出でています。
筆力あり、それでいて力まず大らかに書けていて窮屈さが感じられず落款も美しい。

<p>土書 畜家萬 未嘗乃林丁一畜林 乃未則勿穀等事 余里之為社社主 未嘗不為今也</p>	<p>土書 畜家女術 未嘗乃林丁一畜林 乃未則勿穀等事 余里之為社社主 未嘗不為今也</p>	<p>土書 畜家女術 未嘗乃林丁一畜林 乃未則勿穀等事 余里之為社社主 未嘗不為今也</p>
<p>土書 畜家萬 未嘗乃林丁一畜林 乃未則勿穀等事 余里之為社社主 未嘗不為今也</p>	<p>土書 畜家女術 未嘗乃林丁一畜林 乃未則勿穀等事 余里之為社社主 未嘗不為今也</p>	<p>土書 畜家女術 未嘗乃林丁一畜林 乃未則勿穀等事 余里之為社社主 未嘗不為今也</p>
<p>土書 畜家萬 未嘗乃林丁一畜林 乃未則勿穀等事 余里之為社社主 未嘗不為今也</p>	<p>土書 畜家女術 未嘗乃林丁一畜林 乃未則勿穀等事 余里之為社社主 未嘗不為今也</p>	<p>土書 畜家女術 未嘗乃林丁一畜林 乃未則勿穀等事 余里之為社社主 未嘗不為今也</p>

理杏花 理清栄 蘆彩百
恵子 華雪 扇耀子 合城華子

東石誠こ澄大も 総習和だ春雲く 秀	洞椿石竹大千椿紅千大正椿秀瀧洞千大椿如千紅A大椿仙 書翠習扇拙葉翠瑤葉阪華翠水春書葉雲翠月葉瑤I阪翠台
薄犬市五飯朝青 田飼川十萬倉木 風	安百佐山荒和小須松河林遠富高酒猪礎平金平高藤徳安高 藤木藤村木田林田重合藤澤野井又貞井子山木村田藤橋 野佳千理
春道順佳紫爽啓 緑石子栄苑陽子 5音圖	炎孫直晃香翠智惠琳惠杏花理清榮蘆華城華 代子秀功子代舟晨景子華雪屋麗羅子城華

渡六遊森宮前堀比戸都刀竹高高神庄猿佐佐坂小小黒吳北岸河神小小梅宇
波部渡佐田島町田村丸根中森橋樺保司渡藤藤本坂嶋川村本田岡川山田山
羅登加みる美吉よ初雅佳味簞初桂みろ加路幸豊惠東雲星雲彩まく春
愛等紅陵幸代幸代博らどり美吉よ初雅佳味簞初桂みろ加路幸豊惠東雲星
華英幸平正由好由好由好由好由好由好由好由好由好由好由好由好由好由好

遊高雲陵入
遊高雲陵入
安會部連(60)
遊高雲陵入
安會部連(60)

主上是不喜重才者也。主上欲使輔佐之臣，不謂生手輩，亦不欲重才者也。不謂久重才者也。主上喜能進才士，不喜重才者也。

高京昌も咲高華玉如玄松英右硯五石幕大正竜白高書春京木稻咲春秀澄銘玄大洞秀方玉調京も千雲も遊秀童英や有童幸秀彩東椿竜洞安
遷陵橋苑く舟陵祥川月象村峰田水葉習張阪華泉子陵径秀橋曜舟引水春子翠雲書水正州布橋く字漢く雲水泉峰ま秋泉扇峰 岳翠泉書波
185米吉吉山山山谷八守茂夫村官真松松松真牧前前堀堀堀細藤福深深日日濱花篠橋野西西永仲戸德寺土田田武高高関砂須鈴鉢鈴
名田田種本田崎知木屋木山田澤庭丸島佐岡下野花田 川江村本井島堀澤比高田里野浦沢村川守西部永澤谷中玉山山橋口川永木木
氏名和佑翠藤節明桜美順順翠龍萩草ヶ愛翠白律翠優麗幸津魯幸貴松晴歌清佳湖右竹智智紫煮桂藤 游藤溪悟育蒼哲芳花汐幸秋琉璃利英や
略子子綾玉子子江子子子方峰掌秋之石舟鉢鉢葉子子子春泉子落子子洗月舟真雪子子江雅苑象渠深風仙子子子枝景風苑華華子子